

目 次

館蔵資料紹介 No. 32

- フィールドワークと図書館 林 琢也…………… 1
 寄贈図書一覧（平成25年7月～12月）…………… 3
 図書館本館が新しくなりました…………… 4

情報の探し方（7）

- 図書館の資料を探すとき OPAC…………… 6
 お知らせ…………… 8

館蔵資料紹介 No. 32

フィールドワークと図書館

林 琢 也



私は地理学を専門としており、研究を進める際には、研究対象とする場所へ赴き、関係者への聞き取りやアンケート調査を行っている。また、必要に応じて地域の佇まいを探るための景観観察や土地利用調査を行うとともに、地域内の人間関係やネットワークを把握するために地元の集会や会合に参加することもある。私の場合、農村や観光地を研究対象（フィールド）としているため、当該地域で農業や観光業に従事している方々や関係機関を対象に可能な限り多くの人々の話や声を拾うようにしている。

こうした調査地での聞き取りや情報収集は、何度も足を運び、調査の趣旨や意義を理解してもらった上で行うことが効果的である。良好な人間関係を構築することで貴重な資料や内部の込み入った事情や裏話を教えてもらうことが可能となり、それ自体がフィールドワークの醍醐味であることは言うまでもない。しかしながら、地理学における地域調査とは、単に現地を訪れて話を伺ったり、資料やデータを収集すればよいというものではない¹⁾。

なぜならば、日本国内での調査の場合、既に同地域を対象とした様々な概説書や歴史書、研究書（専

門書）、学術論文等が存在していることが多いからである。さらに、情報・通信技術の発達した現在では、調査の前段階においてかなりの情報（統計データ）や知識を手に入れることが可能である。予め調査対象とする地域の歴史や地勢、産業などに関する状況を把握した上で訪問することは調査自体をスムーズなものにしてくれる。

このため、私は国内のある地域を調査する際には、必ずと言っていいほど、本学図書館にも所蔵されている『角川日本地名大辞典』（角川書店）^{*1}や『日本地誌』（二宮書店）^{*2}、『日本の地誌』（朝倉書店）^{*3}といった書籍や調査地となる自治体の発行する『市町村誌（史）』等を利用して該当する地域の状況について整理することを心がけている。また、対象とする地域について書かれた多様な分野の専門書や概説書も渉猟するようにしている。

例えば、去年は学生とともに世界遺産・白川郷（岐阜県白川村）の調査を行った。3年生を対象とした「地域学実習」という前期に開講する調査実習の科目であるため、4月～6月までは主に調査地域に関する既往の文献や論文を学生に読んでもらい、地域

の特徴を把握した上で調査課題を決めて6月末の現地調査に臨んだ。こうした地域を調査する際には、前述したような図書を用いて概要を把握するのが、それとともに利用するのが、OPAC WWW 検索サービスである。これによって、当該地域のことを記した専門書や資料がまずは本学の図書館内にどれだけあるのかを検索することができる。例えば、「白川郷」と打つと10件の図書がヒットし、「白川村」と打つと18件の図書がヒットする。こうして館内に所蔵されている図書をまずは確認するのである。もちろん CiNii や J-STAGE を利用して同様に学術論文についても検索するし、本学の図書館にない書籍は研究費や個人で購入するようにしている。絶版の場合には学外の図書館から相互利用で取り寄せる場合もある。その他にも、同じような研究課題に取り組んでいる学術書から他地域の状況や特徴を把握し、自らの調査や研究の一般化・相対化を図るといった作業を行う場合もある。また、理論や研究の分析枠組みを深めていくため、人文・社会科学に関連する書籍には日常的に触れている。このため、フィールドワーク中心の研究をしているとは言うものの、図書館にはかなりお世話になっている。つまり、地理学の地域調査とは、フィールドワークとデスクワークの相互作用によって深化していくものなのである。

昨年(2013年)2月に私は『長良ぶどう発達史』を刊行した(写真1)*4。この書籍は、岐阜市長良地区におけるぶどう栽培の歴史を生産者や関係機関への聞き取りと資料の収集によってまとめたものである。自治体の発行する市町村誌よりも狭い範囲(市内の一地区)を対象にした、しかも農業のなかでも果樹(ぶどう)の栽培や販売方法の変遷、生産者の方々の努力の経過を整理した「ローカルな農業史」である。

私はこれまで日本の観光農園や農家直売所、農家民宿、農家レストラン、市民農園・農業体験農園といった農業に観光やレクリエーションの要素を組み合わせた農家経営の戦略や発展のための関係者間の連携やネットワークのあり方について研究を行ってきた。その意味では岐阜市内の長良地区ではぶどう狩りや直売、農業体験(援農プロジェクト)、小学生の農業学習といった活動が積極的に行われており、これまで私が研究してきたテーマと関連するよ

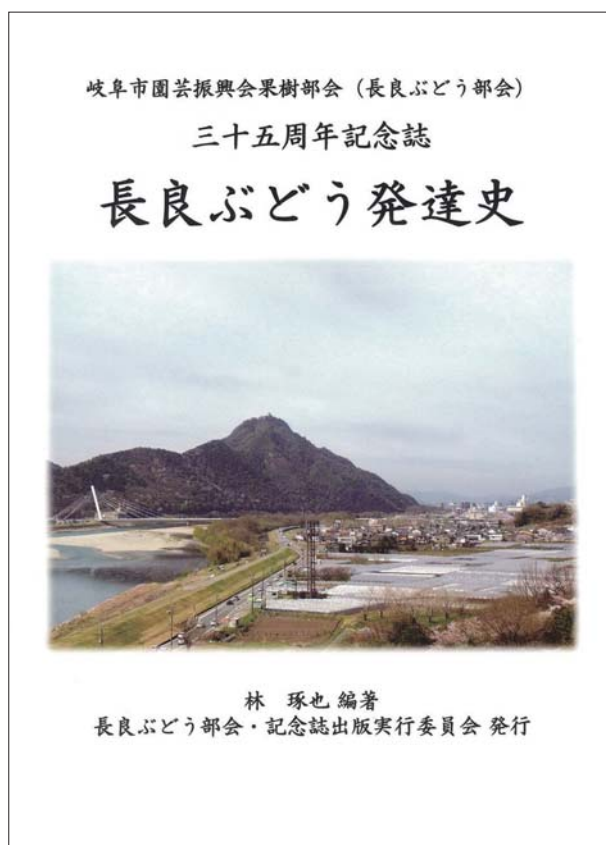


写真1 『長良ぶどう発達史』の表紙

うな内容が数多く存在した。また、同地区での調査を開始する以前から東京都内を事例に都市農業の研究も行っており、近郊農村としての性格も有している長良地区は、そういった視点からも興味をひくフィールドであった。当初はこのような書籍を作成したいという意識はなく、単に「長良ぶどう」の現状について調査してみたいという気持ちのみであったが、調査のために長良地区の生産者や農協職員の方々と話をするなかで、「長良ぶどう」の歩みをまとめる記念誌を作成したいという強い思いの存在を知り、協力したいと思うようになった。

こうした書を作成することの第一の目的は、前述したように、生産者の方々が当地のぶどう栽培の歩みをしっかりと整理したいという思い(願い)を強くもっており、そうした気持ちに応えたいと考えたことである。また、周辺の多くの住民の方々にも地域の農業の歴史や先人の努力を知ってもらうことが必要ではないかと感じたことも大きな要因である。都市近郊での農業は様々な困難を抱えており、営農

環境を良好に保つためには周囲の住民（非農家）の理解や協力は不可欠である。長良地区は岐阜市周辺においてぶどう栽培の盛んな地域と認識されているものの、それを丁寧に整理した書籍はなく、生産者のもとより、農業体験学習を行う小学校などの学校機関でも必要性を感じていたようであった。こうした現状をふまえ、長良地区のぶどう栽培を通史的に整理するとともに、現状や抱える課題にまで言及した内容の書籍が地元の図書館にもあることが重要ではないかと感じたのである²⁾。加えて、知名度の大小や影響力の強弱に関わらず、ある特定の地域内の取り組みに光を当て、時代の一側面を丹念に整理し、記述することは地理学者の社会に対する重要な役割の1つであると考えようになったことも影響している。2年間の調査でまとめたものであり、私の能力の問題もあって、物足りない箇所も少なくないが、こうした図書の存在が郷土への誇りの醸成や地域農業の振興に繋がってくれば望外の喜びである。

地域に開かれた図書館は、大手出版社や学術書などでは取り扱われないような、その地域ならではの地理や歴史に関する蔵書の充実を図っていくことも不可欠であろう。そうした場面において、フィールドワークを主たる研究手法としている研究者が貢献

できることは案外多いのかもしれないと、この小論を執筆しながら強く感じている。

注

- 1) 地理学における地域調査の方法については、本学図書館所蔵の村山祐司編（2003）：『シリーズ<人文地理学> 2 地域研究』（朝倉書店）^{*5}や市川健夫（1987）：『フィールドワーク入門：地域調査のすすめ』（古今書院）^{*6}などが詳しいのでそちらを参照して欲しい。
- 2) 地域の方々の手にすぐにとってもらえるよう、岐阜市立図書館及び岐阜県図書館にも配架してもらっている。

（はやし たくや：地域科学部助教）

岐阜大学図書館所蔵情報

- * 1 本館集密書庫 5 請求記号 291 Kad ほか
- * 2 本館参考 請求記号 291.08 NIH ほか
- * 3 本館3階 請求記号 291.08 Nih
- * 4 本館3階 請求記号 625.61 Nag
- * 5 本館3階 請求記号 290.1 Sir
- * 6 本館3階 請求記号 611.92 Iti

寄贈図書一覧（平成25年7月～12月）

平成25年7月～12月に図書館にご寄贈いただいた図書の中で、本学教職員が著作・編集・刊行等に関係した図書を掲載します。ご寄贈いただき、ありがとうございました。引き続き、ご寄贈をお願いいたします。

●向井貴彦（地域科学部）

- ・見えない脅威“国内外来魚” どう守る地域の生物多様性

【本館3階 487.521||Nih】

●山崎仁朗（地域科学部）

- ・地域自治の最前線 新潟県上越市の挑戦

【本館3階 318.241||Tii】

●寺島隆吉（元教育学部）

- ・英語教育が亡びるとき 「英語で授業」のイデオロギー

【本館3階 375.893||Ter】